

乱獲と砂の堆積によって半減した群落

加賀海岸のイソスミレ (石川県加賀市塩屋町)

越前加賀海岸国定公園の一部、塩屋海岸から片野海岸の長さ4キロには、広大な砂丘が広がっている。広い所で幅200mに達する砂丘は、日本海側では鳥取砂丘に次ぐもの。ところが、もともとの地には鳥取砂丘に匹敵する砂丘があった。明治期から、砂防対策で松の植林を進め、現在では面積の8割が松林になった。よって、砂丘はごく一部になった。ところが、広大な松林で砂丘が人から仕切られた事によって、海滨植物が近年まで守られるという幸運に恵まれたのである。

波打ち際に近い半分は植生はないが、東側半分は豊かな植生が見られる。特に、イソスミレの大群落は、日本一であった。過去形なのは、現在は乱獲や砂の堆積が進んで、個体数は半減以下になっている。塩屋海岸の駐車場からすぐに群生地に出られることもあって、入口部分から乱獲が始まり、ここは壊滅状態になった。あるスミレの展示会では、堂々と「塩屋産」のラベルが貼られていた。行政にも責任があり、イソスミレが絶滅危惧種であるにも関わらず、一向にこの状況を改善しようとはしてこなかった。再度述べるが、ここは国定公園内である。

昭和58年に、植物研究をなされていた天皇皇后両陛下

下が視察に来られ、それを祈念して巨大な石碑が建てられた。来られた意味を少しでも理解されていたならば、もっと違った事になっていたと悔やまれる。

そして、もう一つの大きな原因は砂の堆積である。半世紀以前に造られた大聖寺川の我谷ダムで土砂が流失なくなり、砂が海底に堆積しなくなった。その事によって遠浅であった海岸が削られ深くなり、波が荒くなった。サーフィンのメッカになりつつある。そして、砂丘では反対に冬期の荒波が砂を押上げ、砂丘が盛り上がり行く。40年程前松林との境は、高さ4m程であったが、現在は7~8mもある。これが、2019年に発見したハマネムノキを生む原因でもある。

もともと海滨植物は冬期砂漠になった砂丘から蘇る能力がある。ところが、加賀海岸では想定外の砂の堆積が起っている。そのため、花期に葉が埋まったまま花を咲かせなければならない。当然個体は衰退の道を辿ることなった。

2020年の4月半ば、個体数の三分の一が砂に埋もれていた。このような事は20年前では決して見られなかった事である。



砂に埋もれて、かろうじて花を付けている。2020.4.16